

ボリビア・サンフアン日本人移住地

— 入植 30 年後の実態と展望 —

国 本 伊 代
(中央大学)

サンフアン移住地は、ボリビア東部低地に位置する日本人移住地である。1955年に入植が開始され1985年に入植30周年の記念式典をあげたこの日本人移住地は、ボリビアの「日本人村」と呼ぶに相応しい程一見日本的な村である。日本人である1世とボリビア人である2世の間で日本語が普通に話され、定期的に日本から送られてくる日本のテレビ番組を各家庭が毎晩ビデオ・テープで見ている。日本食はほとんど何でもある。日本の新聞・雑誌も2～3カ月遅れで読める。しゃれたカラオケ・バーもあり、日本で流行している演歌が歌われている。このような「日本人村」が、ボリビアの農業開発に果たした役割は大きい。

サンフアン移住地は農家戸数170余戸を数えるにすぎないが、ボリビア有数の穀倉基地であり、ボリビア農業の近代化に貢献していることで知られている。食用油の不足に悩むボリビアで初めて大豆を栽培し植物油を供給したのは、日本人であった。Sandía Japonesa や Mandarina Japonesa の名で親しまれているような新しい品種を導入してボリビアに「農業革命」をもたらしたのも日本人である。人口90万を越えるラパス市が消費する鶏卵の70%を供給しているのも、サンフアン移住地の養鶏農業である。しかしながら、移住地の1世たちの心は現在大きく揺れ動いている。

1982年と83年に文部省科研費の助成を受けた現地調査を実施した共同研究（玉川大学若槻泰雄・中央大学国本伊代・名古屋聖霊短期大学三橋利光）の成果と今年7～9月にかけて単独で行った現地調査から、この「日本人村」の実態を紹介し展望を試みるのが本報告の目的である。